

八軒家船着場の船宿が共同で寄贈した常夜燈。京屋忠兵衛や堺屋源兵衛の名前が確認できる



生國魂神社北門にある「八軒家船着場の常夜燈」呉服屋連合の寄進によるもの

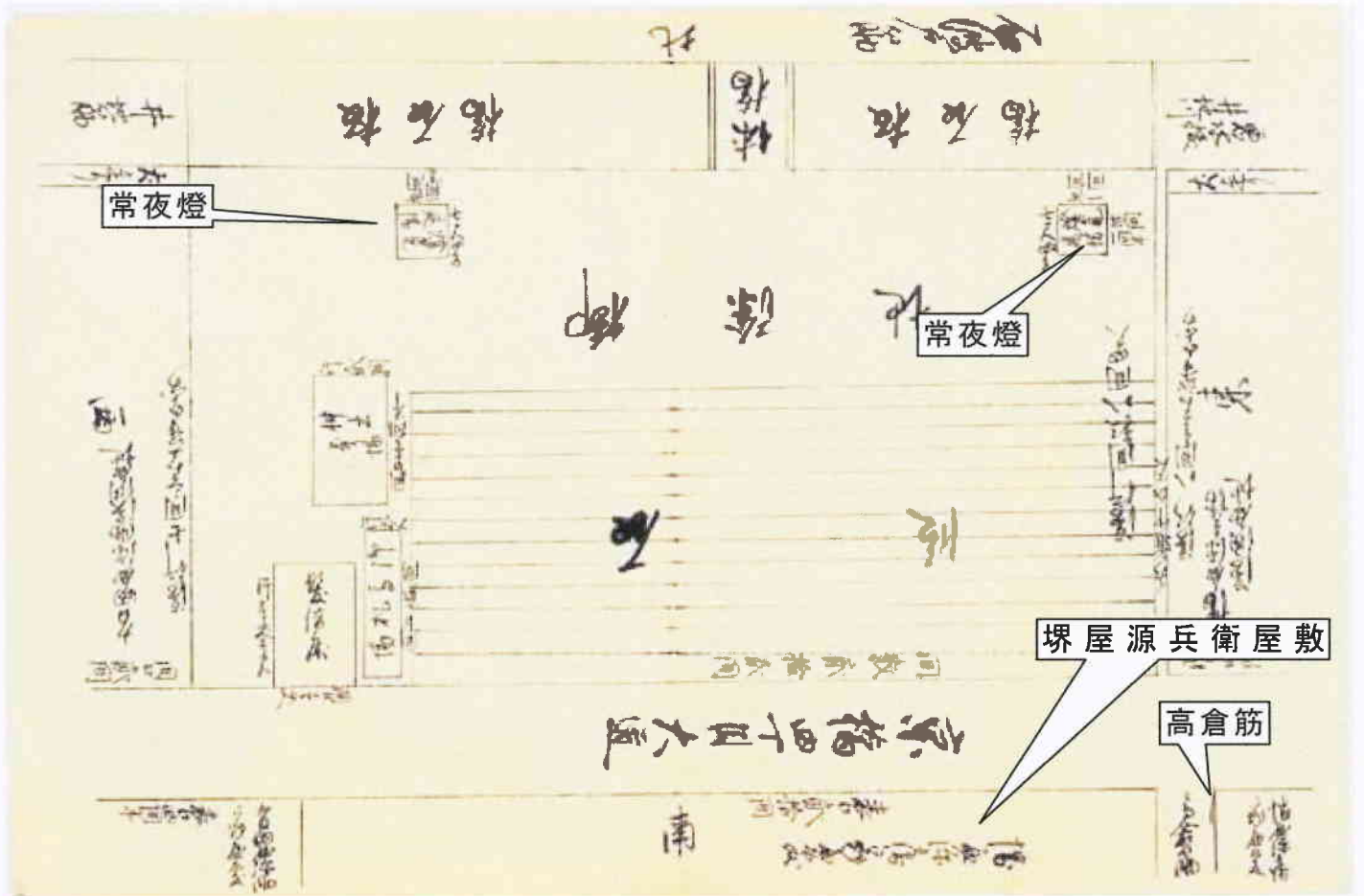


三十石船



京・大阪の船着場についての説明板





八軒家船着場の常夜燈絵図

源 義経ゆかりの地  
**渡辺の津跡**

中央区天満橋京町

現在、土佐堀川に架かっている渡辺橋は、「渡辺の津」が名前の由来で、現在の天満・天神橋付近は、平安中期以降「渡辺の津」と呼ばれていました。

承和11年(844)、「難波鴻臚館を摂津国府の政庁に転用した」との記録が残っており、鴻臚館は渡辺の津にあったということから、摂津国府は渡辺の津にあったと思われます。一説によるとすぐ南にある石町(こくまち)に国府があり、国府跡から石町という町名になったといわれています。

渡辺の津は、熊野参詣の出発点としての位置を占め、道中に熊野権現の分霊を祀ったいわゆる九十九王子社の第一王子社が設けられた場所です。

寿永4年(1185)2月18日、平家軍追討の命を受けた源義経は、渡辺の津から20隻の船で漕ぎ出し、紀淡海峡を南下、折からの暴風雨に乗じて、通常2日かかる行程をわずか6時間で阿波の国勝浦(現在の小松島市)に辿り着きました。

渡辺の津を出立する前、参謀の梶原景時と「舟に逆櫓をつけるかつけないか」で論争になったことは有名です。

天元6年(983)摂津守に叙任した清和源氏源満仲は、摂津多田庄に勢力を張り、嫡子の頼光も摂津守に任じて、渡辺綱や坂田公時などの四天王を従え、当時都を騒がした大江山の酒吞童子などを退治したことで有名です。その四天王の一人渡辺綱は、嵯峨源氏の末で、ここ渡辺庄に本拠を置いていました。ここは全国に繁栄している渡辺姓の本貫地なのです。

面白いことに全国の渡辺さんの家紋は、三つ星の下に一文字のいわゆる「渡辺星」が80%を占めるといいます。この三つ星はオリオン座の三つ星を表したものだそうで、摂津一之宮の住吉神社の祭神と相通ずるものがあるようです。



### <渡辺邸>

「渡辺の津」を支配していた豪族渡辺氏は源義経の出陣に尽力したといわれています。その渡辺氏の邸(大阪市淀川区西三国3)が今でも残っており、子孫の方がその邸で生活されています。



説明板があるものの読み取ることができない



豪族渡辺氏のご子孫の邸

## 3 小楠公義戦之跡

中央区天満橋京町1(「川の駅はちけんや」の東)

- ▶ 楠木正成の子 正行が正平2年(1347)11月、足利尊氏の武将山名時氏・細川顕氏の軍と住吉付近で交戦し、北へ敗走させ、この付近へ追いつめました。この辺りに架橋されていたとされる渡辺橋に殺到した敗兵は、寒中の川へ雪崩れ落ちました。

その時正行は、水中に落ちた敵兵を500名ほど救い上げ、暖をとらせてそれぞれの軍へ返したといえます。

翌年、四條畷で正行は戦死しますが、そのとき助けられた兵が正行軍として従軍し恩義に報いたと伝えられます。

この話が明治時代、欧米人に伝わり非常に感銘を与えたといわれます。



小楠公義戦之跡碑